

おか もと さくら
岡本 桜

業界をリードした「ガス王」 — ガス事業のパイオニア —



岡本 桜 (1878 ~ 1935)

出典：『社史 東邦瓦斯株式会社史』1957

一役として、料金引き上げに取り組んだ。このときの活躍から、「ガス博士」と称された。

1921年6月に名古屋瓦斯社長に就任した。市域拡張に対応して設備投資推進するため、関西電気(後の東邦電力)との統合を決断し、1922年6月、一旦関西電気と合併した上、瓦斯事業を分離して東邦瓦斯が誕生した。発足後の社長となった岡本は、全国に先駆けて熱量販売制を導入した。また、東邦電力が有する地方ガス事業を引継いで、四日市、一宮、半田地区にも事業を拡大し、さらに九州におけるガス事業も統合した。

その後、1930(昭和5)年8月には四日市地区を譲渡して合同瓦斯が誕生し、同年12月には九州地区に西部瓦斯を創設した。1932年、名古屋市との報償契約改定の際、市が計画を進めていた東山植物園の整備の25万円の寄附を申出た。

■全国のガス事業に関わる

岡本は創設期の大阪瓦斯の設備建設に関わり、東京の千代田瓦斯の立ち上げに尽力し、京都瓦斯はじめ四国・山陰から九州地区のガス事業の経営に関与し、1927年7月、東京瓦斯取締役に、1930年4月には副社長となるなど、その活躍は全国の瓦斯事業におよび「ガス王」と呼ばれた。また、松永安左衛門に請われて1927年5月から1933年5月まで、東邦電力の専務取締役・取締役に就任、東京電力(東邦電力系)と東京電灯との東京市場を巡る争覇戦の処理等に当たった。1935年2月、惜しまれながら58歳の生涯を終えた。

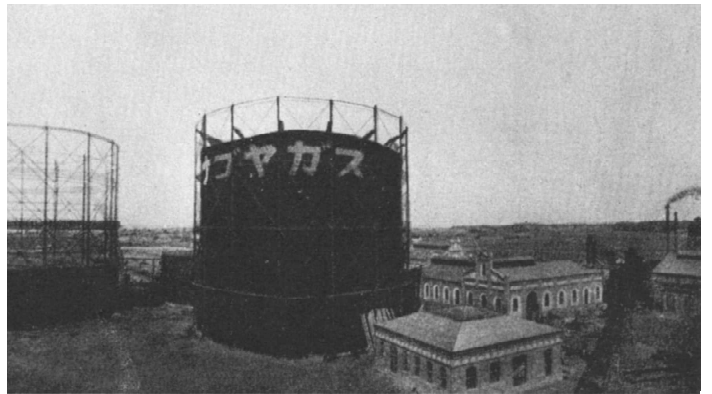
(浅野伸一)

■名古屋瓦斯・東邦瓦斯の経営

1911年には取締役に昇進、技術者として高圧供給方式の採用、ガス漏洩防止策の徹底などを進めたほか、創業時の経営課題に取り組んだ。1つは、ガス灯・電気灯をめぐる争覇戦を経て、名古屋電灯と和親協定を結び(1914年11月)、熱用需要に方向転換した。もう1つは、第1次大戦期における石炭価格の高騰に直面した際、ガス業界のリーダー



名古屋瓦斯本社 出典：『社史 東邦瓦斯株式会社史』1957



名古屋瓦斯御器所製造所 出典：『社史 東邦瓦斯株式会社史』1957



岡本は東山植物園の整備に25万円を寄附した 写真：パンフレット「東山動物園」